広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語と英語の主題化の対照研究
Author(s)	イヴァナ アドリアン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1997 : 51 - 61
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039383
Right	
Relation	

日本語と英語の主題化の対照研究

イヴァナ・アドリアン

1.序論

或る談話では話し手が聞き手に伝える情報の示し方が色々ある。この示し方は、談話の構造やその文の構造、及び話し手が聞き手が知っていると思う情報と関係がある。

聞き手が知っていると思われる情報は既知、知らない情報は未知と称する。この情報は言語的に主題・解説(topic-comment)構文で示す。これについてground-focus（地・焦点）やtheme-rheme（主題・陳述）などの術語もある。

このような術語は研究者によって定義が違う。例えば、topicは或る本来の叙述(predication proper)の一部で、その部分について残りの部分が何かを述べるというように定義できる。

これに対して、themeは叙述外の要素で、その要素が表す談話の世界と叙述とを関連付けると定義する。このtopicとthemeの差は次のような文に見える。

(1) 魚と言えば、太郎は鮭が好きだ。

(2) As for Europe, Italy is the most exciting country for tourists.

この文では「魚」と「Europe 」はthemeで、「太郎」とItalyはtopicであろう。

又、topicは或る文の要素で、その要素について情報を上げる、要求する、或はそのことに関連して聞き手を行動させると言うようにも定義できる。このtopicはgroundと違う。

(3) a) What about Peter? What did he do?
b) $[He]_T$ $[gave\ a\ flower\ to\ Jennifer.]_{C,F}$

(4) a) What about Peter? What did he give to Jennifer?
b) $[He]_T$ $[gave\ [a\ flower]_F\ to\ Jennifer.]_C$

(5) a) What about Jennifer? What did Peter give her?
b) $[To\ Jennifer]_T$ $[he\ gave\ [a\ flower.]_F]_C$

上の文ではTはtopic、Cはcommentで、Fはfocusである。Groundは全てのFの外の部分である。従って、topicはgroundに含まれることになる。この例で見られるように、

ground-focusとtopic-commentの分析が違うし、ground-focusの分析は(5b)文の「to Jennifer」の左方への移動の理由を説明できない。

又、他の定義では、themeとtopicとlogical subjectは同じもので、そのものについて文は何かを述べる。

本稿では、主題は或る文の何かの方法で指示された要素で、その要素の情報内容が文によって変更されるものとする。従って、主題化はこのような要素を指示する過程であると言うことできる。このように定義された主題は(3-5b)文のtopicとほとんど同じになる。

主題は色々な方法で表することができる。言語や意味的な理由によってイントネーションや統語的な標識、文の構造の修正、特別の表現などが主題化を示すことができる。

一般的に主題化の発生は文の情報構造と談話の情報構造とに関係がある。

本稿の目的は英語と日本語の主題化の特徴を分析することである。

2.英語の主題化

主題はその文を含む談話の情報構造と関係があり、既知、あるいは古い情報ということである。その情報はもう談話者の意識に存在して、又は先行の談話で出たもので、談話者の世界についての知識というものである。

主題になる名詞句は普通には定的で、指示的、生命のある(animate)ものである。しかし、一見不定的な主題もある。

(6) Cats have more personality than dogs.

(6)文ではcatsという主題は特別の一匹の猫を示さしてはおらず、不定的である。しかし、(6)のcatsは世の中の全ての猫を示す。この例にとって、世界には猫の集合は一つしかない。だからこの集合は定的なものであって、主題は定的な集合であるとしよう。

名詞は生命程度(animacy degree)によって次のような階層に並んでいると言える。

話し手 ＞ 聞き手 ＞ 三人称の代名詞 ＞ （人間の）名前 ＞ 人間 ＞ 他の生物 ＞ 生命のない物

ある名詞句の生命程度が高けば高いほどその名詞句の主題化の可能性が多い。

ある文の主題は先行の談話からすぐ分かること（例えばすぐ前に出たので）もあるし、一つ、二つ前の文で述べた名詞句をもう一度を述べることもある。前者は期待主題で、後者は交換主題である。

主題化の方法は次のように色々のあるが、その構文は外の機能を持つこともある。

＞ イントネーション。

新しい情報の焦点が強調を受け、主題は強調を受けない。

(7) a) Who loves Jennifer?

b) $[\text{PETER}]_F$ loves $[\text{Jennifer}]_T$.

(8) a) Whom does Peter love?

b) $[\text{Peter}]_T$ loves $[\text{JENNIFER}]_F$.

この文は次のような文脈で見られる。或る男性と女性の集団が存在して、その一人の女性はJenniferで、一人の男性はPeterである。(7b)と(8b)文では焦点が強調を受けて、地は文の残りである。主題は先の談話の(7a)と(8a)文で明らかになる。

(7b)文のJenniferと(8b)文のPeterは先の談話に出たもので、聞き手にとってその情報内容が変わる。(7b)文の「Jennifer」の情報内容は「誰かJenniferを愛している」から「PeterがJenniferを愛している」ということに変わる。(8b)文では「Peter」の情報内容は「Peterが誰かを愛している」から「PeterがJenniferを愛している」ということに変わる。

従って、イントネーションの主の機能は焦点を示すことである。一方、主題はいつも強調を受けない文の部分にあって、文脈から確認される。

＞ 受け身構造。

文の構造が変わって、対象者は主語になる。話し手が

(9) Jennifer is loved by Peter.

という文を言うと、Jenniferを文頭に移動して主語に変化される。英語では主語や主題が深い関係があるから、受け身構文が主題化の機能を果すとも言える。従って、(9)文の実用的な機能は(7b)文の機能とにている。ところが、Jenniferが強勢を受ければ、主題ではなくて、焦点になる。という訳で受け身構造の主な機能は主題化ではないと言える。

＞ 真の主題化。

主題になる名詞句が文頭に移動し、離れた位置にギャップが残されていることである。他の点では文の構造が変わらず全部の要素が元の統語機能を保存する。主語は主題の機能を無くす。

(10) $[\text{Jennifer}]_i$, Peter loves$[___]_i$.

(11) $[\text{For Jennifer}]_i$, Peter would do anything$[___]_i$.

(10)文と(11)文では主語は主題ではない。従って、主題が主語という統語機能ではなくて、文頭の位置と関係があるという可能性がある。主語と主題の外見上の関係は英語では一般的に主語が文頭に存在するからであろう。

(4)

> 左方転移。

主題になる名詞句は文頭に移動して、元の位置に代名詞が存在する。

(12) [Jennifer]$_i$, Peter loves [her]$_i$.

この場合にも主題が主語と違うことがおきて、主題は文頭の位置と関係がありそうである。勿論、

(13) Peter, he would do anything for Jennifer.

のように、主語が主題になる例文もある。だから左方転移は主題化以外の機能もありそうである。左方転移で主題とその統語機能が別々になる。移動された名詞句は主題になり、元の位置に残された代名詞は元の統語機能を果す。

(14) ?? Jennifer, Peter would do anything for her.

のような文は自然ではない。このような文ではJenniferは中心機能（主語、或るいは対象語）を果さないからである。その機能を果す名詞句が英語では特別の標識が付かないので、(14)文ではJenniferがそんな名詞句と間違えられる可能性がある。(11)文のように、Jenniferに周辺機能の標識が付けば、その機能を間違えることがないので自然になる。ただし、(11)文は左方転移の例ではない。

> 右方転移。

主題になる名詞句は文末に移動して、元の位置に代名詞が存在する。

(15) Peter would do [it]$_i$ for Jennifer, [the thing that frightens him most]$_i$.

この場合では、例外的に、主題が文末に存在する。これは主題が必ずしも文頭の位置ではなくて、IP付加の位置にある可能性があることを示す。文頭の位置に存在しないとのは主題化とheavy NP shiftという現象の結合のためであろう。Heavy NP shiftという現象は、文を分かりやすくするためにその一つの長いVP内の要素を文末に移動することである。典型的なのheavy NP shiftの例は

(16) Peter gave [___]$_i$to Jennifer [the flowers he had picked that morning in the fields]$_i$.

のようなものである。つまり、長い要素のもとの位置に代名詞ではなくて、痕跡が残る。なお、移動された要素は主題ではないし、VP付加の位置にある。ただし、右方移動はheavy NP shiftと主題の機能を両方はたす。このことの一つの手掛かりは短い要素の右方転移した文が自然ではないということである。

(17) ? Peter would do [it]$_i$ for Jennifer, [that thing]$_i$.

> 「As for」の構造。

主題になる名詞句に「as for」をつけて、文頭に移動して、元の位置に代名詞を残す。

(18) As for Peter, he loves Jennifer.

この場合、Peterが先の談話に出たが、その後他の人物が述べられたのである。(18)文はもう一度Peterを目立たせている。その文脈は次のようであるかもしれない。

(19) Peter, Jack and Mike are the brightest young men that I know of. Jack and Mike both love Mary, but she ignores them. As for Peter, he loves Jennifer.

この例で見られるように、as for構文は交換主題のために専ら使われる。

＞ 擬似分裂文。

(20) The one who loves Jennifer is Peter.

(21) The one whom Peter loves is Jennifer.

(22) a) Peter gave a flower to Jennifer this morning.

b) What Peter gave to Jennifer this morning was a flower.

c) The one whom Peter gave a flower to this morning was Jennifer.

d) The time when Peter gave a flower to Jennifer was this morning.

中心項も周辺項も擬似分裂化されることができる。一般的に、wh節は話し手が聞き手の知識にあると思っていることを述べる。先行の談話、或はその状況に基づいて、話し手がそう思うことができるのである。このような談話の古い情報との関係があるし、談話の中にその情報を指示するから、擬似分裂文は主題化の機能も果すことも言える。

＞ 分裂文。

(23) It is Peter who loves Jennifer.

(24) It is Jennifer whom Peter loves.

(25) a) It was a flower that Peter gave to Jennifer this morning.

b) It was to Jennifer that Peter gave a fower this morning.

c) It was this morning that Peter gave a flower to Jennifer.

分裂文は二つの種類がある。一つは、(26b)文の関係詞節のように古い情報を示し、文の残りは新しい、時々対照的な情報を示す。

だから分裂された要素は情報焦点であると言える。

(26) a) Someone loves Jennifer.

b) It is Peter who loves Jennifer.

他方、(27b)のように分裂された要素は古い情報を現して、関係節は新しい情報を含む場合もある。

(27) a) Peter loves Jennifer.

b) It was to Jennifer that Peter gave a flower this morning.

従って、後者の種類だけ主題化の例とすることができる。それで、主題化は分裂文の主な機能ではないと言える。それは談話の中のできごとの時間の判断と関係がある（注1）。

主題はその文の中に意味的な役割があることもないこともある。意味的な役割がある主題はその文の中にある役割を果す要素と同一指示的である。

中心役割を果す名詞（例えば対象）は主題になると、そのまま主題位置に移動するが、周辺のほう（例えば理由）はその前置詞と一緒に移動しなければならない。

3.日本語の主題化

日本語でも主題は既知で、定的、指示的である。又、生命程度と主題化の容易さの関係もある。一番高い生命程度のある「私」は普通に「は」で、例外の場合だけ「が」で表示されるのである。

日本語の生命程度の階層は英語のほうと同一であるようである。

主題は助詞「は」で指示される。「は」は特別な主題の標識であるので、日本語の主語は主題とほとんど関係はない。勿論、他の主題を示す方法もある。例えば、「といえば」と「ということについて」や分裂文の構文がある。

「は」の主題は期待主題も交換主題も含む。

(28) a) 昔々、その昔、都から遠く離れた田舎に、一人の男の子が生まれた。

b) ところが、どういうわけか、この男の子は背の丈が大人の小指ほどしかなかった。

c) それでも、両親は、天からの授かりものじゃからと、大いに喜び、「一寸法師」と名付けてたーんとかわいがったそうな。

d) ところが、一寸法師は、どういうわけか、何年たっても、ちーっとも大きくならなかった。

(28a)文では「男の子」が談話に導入される。(28b)文では「男の子」はすぐ前出たもので、期待主題になる。(28d)文では「一寸法師」は交換主題である。なぜかというと、すぐ前で主題は「両親」だったからである。(28c)文では「両親」は「は」で標識されるし、交換主題だと言える。「両親」は先の談話に明確に出なかったが、聞き手の知識にあったと言えるのである。それにしても、時々作家は「は」を主題であることができない（例えば小説の一番最初の文の）ものに付ける。従って、(28c)の「両親」はこのような使い方の例でもある。

「は」は先の談話に出た集団を指示する。この集団は定的である。

(29) a) 太郎はあの本を読んだ。

b) 太郎の友達はみんなあの本を読んだ。

c) 誰はあの本を読んで、誰は読まなかったか。

d) 太郎と花子はあの本を読んだが、私達は読まなかった。

(29a)文では集団の員は一人だけで、「太郎」である。(29b)文では「太郎の友達」は定的な名詞句ではないが、それが指示する集団は一つしかなくて、定的である。(29c)文では「誰」は不定的な不指示なものであるが、文の中の二つの「は」は同じの文脈から分かった一つの集団を表する。それを明らかにするために、対照の「は」が明確に使われる。でなければ、文は(30)文のように非文法的になる。

(30) * 誰はこの本を読んだか。

なぜかというと、(30)ではあの本を読んだ人と本を読まなかった人全員の集団を示すということが分からないからである。(29d)文では、「は」は太郎と花子と私達全員を指示する。上述の場合と同様に対照の「は」が使われている。(31)文のように、文を短くする時も、聞き手は「は」が全部の集団を指示することが分かるし、文脈から長い文を復元できる。

(31) 太郎と花子は読んだ。

一般的に、ある文のどの要素でも主題化を経験する。主題になる要素は「は」が付いて文頭に移動する。元の助詞は「が」、または「を」であれば、それらの代わりに「は」を使用して、「に」であればそれと一緒に、或はその代わりに使用することができる。そのほかの助詞の場合には、一緒にしか使うことができない。

このことの理由は「が」と「を」がついた要素は中心機能を、その外のは周辺機能を果たすからである。前者の場合の代用は「が」と「を」の助詞を復元することができるからでもある。

(32) a) 太郎<u>が</u>教室<u>で</u>ノート<u>に</u>自分の名前<u>を</u>書いた。

b) 太郎<u>は</u>教室でノートに自分の名前を書いた。

c)太郎が教室でノートに自分の名前<u>は</u>書いた。

d) *太郎が教室<u>は</u>ノートに自分の名前を書いた。

e)太郎が教室<u>では</u>ノートに自分の名前を書いた。

f) *太郎が教室でノート<u>は</u>自分の名前を書いた。

g)太郎が教室でノート<u>には</u>自分の名前を書いた。

h)太郎が花子に一万円を上げた。

i)花子は太郎が一万円を上げた。

j)花子には太郎が一万円を上げた。

英語と同様に、主題はIPの節点に付加されることもあり、この場合は主題の元の位置にギャップが残る。

(33) [この写真は]$_i$太郎が[___]$_i$取った。

これに加えて、主題の要素がD構造からIP付加された位置に生じたものであると思われる主題文もある。その文の中では主題になった要素の元の位置はない。これは、いわゆる「私は鰻だ」のタイプの文で、その示す意味はその文脈と一緒にしか判断できないかもしれない。

そんな文が英語でもある。

(34) Speaking of Peter, how is Jennifer these days?

のような文は、PeterがJenniferの主人であるということを知らなかったら判断できないことである。

日本語では掻き混ぜ操作という現象がある。それで文の要素の順番が変わって、その要素を繰り返してIP付加するというようにその現象を解釈することができる。

掻き混ぜ操作の一つの結果が主題化に似ている。

(35) 名前と住所をここに書いて下さい。

主題文でも掻き混ぜ操作が行われることができるが、「は」の主題が一番左の位置から遠ければ遠いほどその文が自然ではないようである。

(36) a) 太郎は自転車で大学まで行きました。

b) 自転車で太郎は大学まで行きました。

c) 自転車で大学まで太郎は行きました。

この場合では一番左の要素は既知ではなくて、その位置は新しい情報の焦点になるようである。

主語の主題の場合には、その要素がIP付加の位置に移動するか、IP指定位置に残るかはっきり分からない。

4.対照

英語と日本語の主題化の類似点と相違点は次のようになる。

類似点

>主題化は談話の中の古い情報の存在によって行われること。

>主題はいつも古い情報の中から文脈で判断できること。

>主題した周辺要素がその標識（前置詞または助詞）と一緒に移動すること。

>原則としては主題がIP付加の位置にあること。

＞主題が最初からIP付加の位置に生じて、その判断が文脈、或は話し手や聞き手の知識に依存する文があること。

＞主題は定的な集団であること。

相違点

＞日本語では主題を標識する「は」の存在すること。

＞英語では主語が主題と深い関係があるが、日本語ではそんな関係はないこと。

5.結論

本稿では主題化の特徴を調べた。

主題は一般的にIP付加と文頭の位置に存在する。ただし、時々主題化は他の現象と結合して、主題が文頭ではないこともあるし、又他の場合には、IP付加の位置ではないこともある。

更に、(37)文のように、生命のなくて、不定的、集団ではないものも主題化されると言える。

(37) With a sword, the prisoner was summarily executed.

実際には、この文では主題化された 部分は焦点ではないかという問題が出てくる。

日本語では上述の小説の初めに出る主題や(38)文のようなものもあろ。

(38) 魚といえば、太郎は鮭が好きだ。

この文では「魚」も「太郎」も主題でありそうである。でも、一つの文は二つの違ったものについて何か述べることができるかということが問題になる。

このような問題は今後の課題である。

6.注

注１。

(39) a) Peter and Jennifer have known each other for a long time.

b) When she was 17, Jennifer began receiving love letters and flowers.

c) It was Peter, who was in love with her, that wrote her passionate love poems.

(10)

d) Peter, who was in love with her, wrote her passionate love poems.

(39a-c)の談話ではPeterは詩を書いて、手紙の代わりに花とともにJenniferに出した男性である。(39c)文のできごとは(39b)のできごとの前に行われたものであるという判断になる。

一方、(39c)の分裂文の代わりに(39d)の普通の文を談話に入れたら、(39d)のできごとは(39b)のできごとの後に行われて、Peterは手紙や花を出すのではなくて、詩しか書かない男性であるという判断になる。

7.参考書

1. 安藤貞雄、1990、「英語の論理・日本語の論理」、大修館。
2. 久野章、1981、「日本文法研究」、大修館。
3. 柴谷方良、1993、「主題と主語」、「日本語と日本語教育」、第１２巻、明治書院。
4. 三原健一、1994、「日本語の統語構造」、松柏社。
5. Andrews, Avery 1990 "The Major Functions of the Noun Phrase", 'Language Typology and Syntactic Description', Timothy Shopen ed., Cambridge University Press.
6. Comrie, Bernard 1989 'Language Universals and Linguistic Typology', University of Chicago Press.
7. Delin, Judy & Jon Oberlander 1995 "Syntactic Constraints on Discourse Structure, the Case of It-Clefts", Linguistics 33(1995).
8. Foley, William A. & Robert D. Van Valin Jr. 1990 "Information Packaging in the Clause", 'Language Typology and Syntactic Description', Timothy Shopen ed., Cambridge University Press.
9. Hawkins, John A., ed. 1990 'Explaining Language Universals', Basil Blackwell.
10. Hinds, Wako Tawa 1986 'On the Concept of Transitivity and Case Markers in Japanese', PhD thesis, University of Philadelphia.
11. Miyagawa, Shigeru 1987 "Wa and the WH Phrase", 'Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa', J. Hinds, S.K. Maynard, S. Iwasaki eds., John Benjamins Publ. Corp.
12. Shibatani, Masayoshi 1992 'The Languages of Japan', Cambridge University Press.
13. Vallduvi, Eric & Elisabet Engdal, 1996, "The Linguistic Realization of Information Packaging", Linguistics, 34(1996).

14. Van Kuppevelt, Jan 1995 "Discourse Structure, Topicality and Questioning", Journal of Linguistics, 31(1995).